

前期日程

令和五年度入学試験問題

国語（国語総合・現代文B・古典B）

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 二、解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
- 三、解答用紙は七枚です。
- 四、各解答用紙には受験番号を記入する欄がそれぞれ二箇所あります。二箇所とも記入しなさい。
- 五、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本は成田空港に着く前から始まっていた。

それは、デリーからの飛行機をバンコクで降り、バンコクから、東京行きの飛行機に乗りかえたときである。機内に一歩足を踏み入れたとたん、デリーから乗ってきた飛行機とは空気がちがった。何かがいつもかすかに匂っているという感覚が魔法のように消え、その瞬間、「空調」という目に見えないものの存在がまるで手にとるように感じられた。同時に圧倒的な物質の豊かさが目に飛びこんできた。床の絨毯も座席も背もたれの白い紙も、すべてが新しかった。すべてが清潔であった。カバーをかけた替えたばかりの枕も、きれいに畳まれた毛布もありあまるほどあった。飛行機が離陸するやいなや、おしぼり、酒のつまみのおかき、日本語の放送、と外国から帰るたびに、私にとっていつも日本の始まりを告げるものが続いたが、インドからの帰り、日本は、まずは飛行機内の圧倒的な物質の豊かさから始まっていた。

成田の第二ターミナルに降りると、その思いはいよいよ深くなった。ふだんは気がつかないようなことばかりに気がつく。やはり空調が行き届いていること。惜しげもなく電気が使われ、すみからすみまで明るいこと。エスカレーターが音もたてずに整然と動いていること。はげたペンキも、錆びた鉄も、へこんだ樹脂も目に入らなかった。すべてが奇跡のような豊かさを語っていた。

中でも驚いたのは、場内を走る小さな清掃車である。用があつて出発便のロビーまで足をのぼすと、夜も遅く人気がないがらんとした空間に、デイズニー・ランドの乗り物のような小さい電気自動車が音もなく動いていた。五十代後半ぐらいの女が中央に腰をかけて運転しているのだが、よく見ればモーターが静かに作動し、車体の下の円形のモップが勝手に回転して床をみがいでいる。女は腰をかけているだけでは申し訳ないといった風に、長い柄のモップを片手に握り、おりおりその手をのぼしては、床のあちこちをこすっていた。

私はデリーの空港で見かけた掃除夫を思いだしていた。

何のアナウンスメントもなく、飛行機の出発が数時間にわたって遅れていた。出発ロビーには、さまざまな顔かたちと顔色の人が、思い思いの姿勢で、疲れた顔を見せていた。もう夜中を過ぎて明け方に近かったのである。私はなるべく明るい蛍光灯の下の椅子を確保し、買ったばかりのナイポールの『India』という本を読もうとしていた。あたりを、さきほどから、一人の男が腰をかがめて掃除をしている。若い男なのに元気がなかった。手には三十センチほどの短い柄のついた竹ぼうきをもっている。あちこちのホテルの庭で、炎天下にそのような竹ぼうきを手に腰をかがめた男を見るたびに、少なくともなぜもう少し柄の長いほうきを使わないのだろう、と首をかしげたのと同じものだった。その若い掃除夫が鮮明に記憶に残っているのは、もう必要のなくなった細かいお金をその男に渡すべきかどうか迷っていたからである。名所旧跡に際限なくむらがる物乞いにおびやかされ、細かいお金をやつきになって貯めているうち、かなり多量の小さな紙①へイや小銭が残ってしまったのであった。男はむろん物乞いではなかった。だが短いインド旅行のあいだに、私は物乞いでもない人間にお金を施そうとするような神経をもつにいたっていたのだ。しかも、お金を施された男がそう驚きもしないであろうという確信すらあった。それでもついに渡さずじまいに終わってしまったのは、羞恥心とものぐさと両方あったのにちがいない。

成田空港のがらんとしたロビーでは、どこからかもう一台同じ清掃車が現れた。同じ年格好の女が乗っている。日本じゃあ、あたしたちの年になると、働くたって、もうおそうじのオバサンぐらいしかないわよ——知人の日本の女たちは、よく自ギヤ②クの的にさういう。だがこうしてインドから戻ってきてみれば、日本では「おそうじのオバサン」にこれだけ金のかかった機械を与えているのだ。女たちは何か短く笑い声をあげたあと、体を折って挨拶を交わし、それぞれモップを片手に、小さな車をまた別々の隅に向けて運転していった。

私が目にしたのは、いうまでもなく、「先進国」と「後進国」との差であった。それでいて、それは、けっして「先進国」と「後進国」の差で片づけられるべきものではなかった。日本人の私は、インド人と同様、西洋人ではなかったからである。日本とインドの差は、「先進国」と「後進国」の差であると同時に、非西洋文化圏内——「東洋」(Asia)と呼ばれるところでの、「優等生」と「劣

等生」の差なのであった。

インドはかつて天竺であった。日本とインドの関係は古い。だが、これだけの言語、文化、宗教、人種の垣根を越えて歴史を共有するようになったのは、西洋が世界で覇権をにぎり、非西洋としての「東洋」という概念が創られ、その「東洋」という概念を、日本やインドも含む、非西洋側の人間が積極的に受け入れるようになったときからである。そしてその時からすでに、日本の「優位」とインドの「劣位」が始まっていた。日本は植民地となる運命を逃れたのに、インドは実に長いあいだイギリスの植民地だったからである。インドが独立したあと、今度は、日本の驚異的といわれた経済発展を背景に、「優等生」としての日本と「劣等生」としてのインドとの間の開きは、いよいよ開いていった。

だが歴史は、私たちのあずかり知らぬところで、ひっそりと、そして長いあいだかけて、この「優劣」の逆転を準備していたのである。もちろん私のいう逆転とは、あの、よくいわれる価値の転倒——飽食している人間が、死と隣りあわせに生きている人間に尊厳や美を感じるといった類いの逆転ではない。私にはどう考えても日本がインドの貧しさを羨むべきだとは思えない。ここでいう逆転とは小説の言葉の問題である。

数年来のこの思いをますます強くしたのは、日本に戻ってから、ナイポールの『India』を読み終わったせいである。もう少しインドのことを理解したいと、最後に泊まったニューデリーのホテルの、うす暗い小さな書店で買ったのが、この憂国の書であった。インド人の血を引きながら、遠くはなれた英連邦のトリニダードで生まれ育ち、インドに対する想いを一人でふくらましていった作家ナイポールが、現実のインドに直面してあれこれ思い悩んだところを書いたものである。ありとあらゆる階層、地域、言語圏、宗教、職業に属すインド人との対話を通じて浮き彫りになるのは、複雑な歴史をもつ国をさらに分裂させ、近代国家として機能するのを妨げている数々の問題である。いわく、カースト制度、狂信、無知。もちろんあの果てしない貧困。そして、ところどころ言葉の問題が出るたびに、そこからもナイポールの憂国の嘆きが聞こえてくるのである。言葉が墮落してしまつたと。ヒンディー語、ベンガル語、パンジャーブ語、ウルドゥー語、タミル語、マラーティー語——かつては偉大な詩を生みだしてきたさまざまなインドの言葉は、近代にふさわしいものに変貌できずに、墮落し、幼稚なイデオロギーの温床となつて

しまったとナイポールはいう。^(注1) タゴールのような存在は例外であった。

インドでは、両手で数え切れないほどの貧しさに加えて、近代文学の貧しさというものさえあったのだった。

言葉が貧しくなる——言葉から命がなくなるといふことは哀しい現実感をもって想像できた。それでいて、『India』を読んでいた私は、憂国の徒ナイポールに同情する気にはならなかった。インドの言葉の貧しさを嘆くナイポール自身、英語という言葉で書いていたからである。英語という言葉で書いていたからこそ、私がこうして翻訳されないままに読めたからである。そもそも私がインドに行きたいと思うようになったのも、インド系の作家たちが英語で書いた小説を、ここ数年の間に次々と読んできたからだ。本場のチャツネを食べてみたい、ブーゲンヴィリアの匂いをかいでみたい、ウルドゥー語のガザルを聞いてみたい、街中をゆく猿を、駱駝^{らくた}を、象を見てみたいと——かれらの書く一風変わった英語と物語にくり返し引きこまれ、見知らぬ国への想いに幾度となくつき動かされ、ついにあくがれるままに旅立ったのであった。

インドのさまざまな言葉は、これからも長いあいだ命を失ったままになるのかもしれない。そしてそれは、嘆いても嘆き切れない、人類の損失なのかもしれない。だがインドの言葉をどれひとつ知らない私にとって、その損失は具体的に感じられるものではなかった。そのかわり、一部のインド人がその代シ^④ョウとして手にいれた英語の価値は、具体的に感じられるものであった。

インド人はたんなる英語を手に入れたのではない。かれらは、たんに、英語を流暢にあつかえる「東洋」の人間だというわけではない。かれらはまさに植民地化され、英語を自分のものとしながら英語から疎外されることによって、二十一世紀を先取りし、世界言語としての英語を手に入れたのである。

世界言語としての英語——それは、英語というものに対し、生まれながらの権利をもたない人間の使う英語である。二十一世紀が、そのような世界言語としての英語の時代となるであろうことは、すでに予想されている。今、言葉にたずさわる人間で、母語をさしおいて英語で書こうとする人間の数は地球の上に急速に増え、このままいけば、かれらが英語で書く世界が、即、

「世界そのもの」となるだろうからである。その時、英文学——否、英語文学は、即、「世界文学」を意味するようになる。のみならず「世界文学」は必然的に優れたものになる。読み手書き手となる人間の数が圧倒的に多いうえ、ここでは、言語がその本質において外からきたものとして認識されているからである。他の言語で書かれた小説は、過去の栄華も夢と色あせ、質量ともに、どこまでも周辺的なものになってしまうであろう。長い間、インド人の使う英語はアングロ・インディアンと呼ばれ、「真」のシエークスピアの英語と区別され、見下され、嘲笑の対象となってきた。そして今、そのように「真」の英語からヘダ^⑤てられ、まやかしの英語を使ってきたインド人（及び他の旧英国の植民地の人々）こそ、「世界文学」のいな手として、パラ^{（注2）}ダイグマティックな存在とも先駆者ともなつて当然なのである。

富んでいる者が神の国に入るよりは、駱駝が針の穴を通る方がもっとやさしい——これは日本でもよく知られている聖書の言葉である。「世界文学」を書くことと神の国に入ることの比較は重要ではない。重要なのは、この言葉によつて示される、富んでいるものの不幸である。それは、捨^{（4）}てざるをえないものの大きさゆえに、選ぶべきものを選べない不幸である。

植民地化されるどころか、隣国を植民地化した日本。ここでは高等教育はもちろんのこと、すべての言語活動が日本語だけで行えることが、あたりまえすぎるほどあたりまえの前提であつた。その前提を背景に日本の近代文学は花開いた。日本の経済の繁栄がそれにさらに肥やしをやつた。豊かな日本近代文学をもつ私たち日本人の幸福は、まさに富んでいるものの不幸にほかならない。

もう十年近く前、ちょうど日本語でものを書きはじめたころである。当時、私はアメリカの大学で、学部生むけの、日本近代文学の授業を受けもつようになった。そのとき非西洋文化圏での「近代文学」で独立した講座があるのは日本近代文学だけであつた。いわゆる「少数民族」の生徒が実に多いクラスで、アジア系アメリカ人と呼ばれる生徒たち以外に、韓国や台湾、香港から直接きた生徒もいた。黒人もいた。そしてその中にインドからの学生が二人、女と男とひとりずつまじっていたのである。おりし

も日本の企業がアメリカの不動産などを買いあさっていた時期であった。これが「日本経済」と名のつく授業だったら、インド人の顔を見いださない方が不思議であったろう。だが私が受けもっていたのは「日本近代文学」という授業であった。珍しいせいで、ひとときわエグゾチックに見えるそのインド人の生徒たちを前に、私は、「東洋」という歴史に押しつけられた抽象概念が、まざまざと生きているさまを見たような気がした。それは感動さえよんだ。そして私は、自分の祖国がかくも豊かな日本近代文学の伝統をもっているのを、心の中で誇った。その豊かな日本近代文学が生みだしたさまざまな栄光と挫折、それを先駆者として、生徒の前に示すのを使命とまで感じていたような気がする。

私は半分ぐらいアメリカで育った人間である。

あのころ私の胸をひたしていた日本語を書きたいという渴望、日本語が書けるという驚き、日本語を書けるといって喜び——それは富んでいるものの幸福からくるものであった。同じ日本近代文学の豊かさは、今はもう、渴望も、驚きも、喜びも、ほとんど与えてくれない。日本語で書くことが日常になってしまった……日本そのものが日常になってしまったせいだろうか。それとも、世界での英語の覇権がいよいよ目につくようになってしまったせいだろうか。今、歴史が私たちに用意していた逆転は、私の目にも、くまなく見えるようになった。アメリカで半分育っていないながらも、捨てざるをえないものの大きさをゆえに、選ぶべきものを選ばなかった不幸——わかっているのは、私自身、この先その不幸の認識から完全に逃れることはないであろうということである。

日本語を母語としながら英語を選ぶ作家は、これから少しずつ増えてゆくであろう。それでも日本語で書き続ける作家は残り続ける。⁽⁵⁾ そのうちのひとりとして私は問い続けねばならない。日本語は墮落しないだろうか。日本語が読め、日本語が書けるといふことが恵みであると思えるような言語であり続けるだろうか。日本語で書く必然性もない人間にまで、日本語で書きたいという欲望をおこさせる、そんな言語であり続けるだろうか。

(後注) このエッセイが書かれてから十余年。その十余年はインターネットの発達と重なっている。そして、インドはインターネットで英語を流暢に操れる人たちを中心に、急速な経済発展をとげつつある。

(追記) さらに十余年たつうちに英語文学というものについてもっと細かく考えるようになった。英語を母語としない作家が書いた英語文学、それに対し、母語を英語とする作家、果ては親の代から英語を母語とする作家が書いた英語文学——その二つはやはり区別して考えるべきではと思うようになったのである。その区別は明瞭なものではないし、すべての場合に当てはまるわけでもない。だが、後者のなかには、昔から「英文学」と呼ばれているものと繋がりを意識し、その系譜をさまざまな形で継承しようとして書く作家がいると思う。彼らが書くものは「世界文学」である以前に「英文学」である。そこにはキング・ジェイムス訳の聖書やシェイクスピアの警句的な台詞を始め、「英文学」——米文学等も含む——の伝統がより強く脈づいているはずである。

「世界文学」は必ずしもハリウッド映画のようにグローバルな消費者を相手にするわけではない。だが「英文学」はグローバルな消費者を相手にするのは最初からちがったところで書かれているはずである。

(水村美苗「インドの「貧しさ」と日本の「豊かさ」より。一部変更を加えた。)

注1 タゴール——「二八六一〜一九四二」インドの詩人・小説家・思想家。インドの近代化を促し、東西文化の融合に努めた。一九一三年、ノーベル文学賞受賞。

注2 パラダイグマティック——典型的。

問一 傍線①～⑤の漢字は読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に直せ。

問二 傍線部(1)「もう必要のなくなった細かいお金をその男に渡すべきかどうか迷っていたからである」とあるが、筆者はお金を渡そうと思ったにもかかわらず、どうして渡さなかったのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 筆者は、若い掃除夫が短い柄のついた竹ぼうきを持つ姿を不可解に思い、理不尽な状況に置かれている若い掃除夫に同情していた。そこで筆者はその若い掃除夫にお金を渡そうと考えたが、物乞いでもない男にお金を施すことに抵抗を覚えた。なぜなら筆者には、そのような行為は無神経なもののように思えたからである。

イ 筆者は、若い掃除夫が短い柄のついた竹ぼうきを持つ姿を不可解に思い、理不尽な状況に置かれている若い掃除夫に同情していた。そこで筆者はその若い掃除夫にお金を渡そうと考えたが、物乞いでもない男にお金を施すことをためらった。なぜなら筆者は、若い掃除夫は決して感謝しないと考えたからである。

ウ 筆者は、インド旅行を経験することで、物乞いでもない男にお金を施そうと思うような感覚を身につけてしまった。加えて、筆者にはお金を施された男が、驚きもせずを受け取るであろうことが容易に推測できた。しかし筆者にはそのような行為は恥ずかしいもののように感じられると同時に、面倒な思いも抱いたからである。

エ 筆者は、インド旅行を経験することで、物乞いでもない男にお金を施そうと思うような感覚を身につけてしまった。加えて、筆者にはお金を施された男が、驚きもせずを受け取るであろうことが容易に推測できた。しかし筆者はそのような行為は恥ずかしいものであると感じた。なぜなら、自分が植民地の支配者と同じであるように思えたからである。

オ 筆者は、名所旧跡でむらがる物乞いに、金銭を渡すことをしなかった。しかし、インドを離れるに際して、筆者はそのことを思い出し恥ずかしく思った。そこで筆者は男にお金を渡そうと思った。しかし物乞いでもない男にお金を渡すことで、それまでの自分の行為が許されるとは思われなかったからである。

問三 傍線部(2)「だが歴史は、私たちのあずかり知らぬところで、ひっそりと、そして長いあいだかけて、この「優劣」の逆転を準備していたのである」とあるが、この「優劣」の逆転の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 日本は植民地となる運命を逃れたが、インドは植民地となった。そのために、国内の偉大な詩を生み出してきた言葉は命を失い、墮落してしまったとナイポールは嘆くが、そのナイポール自身がその主張を世界言語としての英語で書いていくという逆転。

イ 日本は植民地となる運命を逃れたが、インドは植民地となった。そのために、インドの近代文学は貧しいものになったが、国外の人間から見れば、インドの言葉が近代にふさわしいものに変貌できなかった損失は具体的に感じられないという逆転。

ウ 日本は植民地となる運命を逃れたが、インドは植民地となった。そのために、インド人は世界言語としての英語を手に入れ、彼らが英語を用いて書いた小説に押されて日本語で書かれた小説は、周辺のものになっていくだろうという逆転。

エ 日本は驚異的といわれた経済発展を遂げたが、インドには経済的な貧しさとともに近代文学の貧しささえあった。しかし墮落したとされるそうした言葉で書かれた作品に惹かれて、インドへ旅に出た筆者のような人物もいるという逆転。

オ 日本は驚異的といわれた経済発展を遂げたが、インドには経済的な貧しさとともに近代文学の貧しささえあった。しかしインドでは、かつて偉大な詩を生み出したような人物がいたという逆転。

問四 傍線部(3)「英語を自分のものとしながら英語から疎外される」をわかりやすく説明せよ。

問五 傍線部(4)「捨てざるをえないものの大きさゆえに、選ぶべきものを選べない不幸」とはどのような意味か、簡潔に説明せよ。

問六 傍線部(5)「そのうちのひとりとして私は問い続けねばならない」とあるが、その発言に込められている筆者の思いについて、本文全体を踏まえて説明せよ。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

朝、ノマはひとりで目を覚ました。母さんに布団をはがされる前に目を開けたのは、きつとなにかよいことがあるからだ。そうでなくても、朝はなにか思いもよらない、ふしぎな考えが浮かぶときだ。そうだ、今日は、キドンインチの子犬を連れだして小川に入れて泳ぎを習おうか、それとも、ナツメの木の家の垣根の根元に埋めておいた石英に、キドンイのいうようにホントに水晶が生えたかどうか見てみようか、それでバツと起き上がったのだ。

ノマはじつと考えてみる。夜つてのは、まったく野良ネコみたいだ。夕方には中庭からそろりそろりとしのびこんで来て暗くなるし、朝は明かり窓からこっそり逃げ出して行くんだから。だけどこれは今日初めてわかったことじゃない。そうさ、右手の指が五本、左手の指が五本、みんな合わせて十本、これだってちゃんとわかってるんだ。

そのうちにハツと、ノマはきのうキドンイのおじさんから穴のあいた白銅貨を一枚もらったことを思い出した。

「でうだ、ぼくの、ピッカピカのまっさらなお金」

というなりノマはそれこそ蜂に刺されたみたいにガバツと起き上がった。

ノマはとても注意深く、脱ぎっぱなしの(注1)パジの下に手を入れて、そろそろと腰紐ひもをさぐってみた。

けれど手に当たるものはなにもなくて、ただ平たい腰紐がするりと滑り出ただけ。しばらくつけておいたはずの結び目がほどけたまま、お金は消え失うせている。なんにも結んでない前と同じ、ただしわくちやの汚れた腰紐のまんまだ。たしかにきのうここにお金を結びつけたのに、もしかするとノマはキドンイのおじさんからお金をもらってもいないのに夢を見たのかもしれない。だから腰紐の端になにもないのだろう。ノマはもう一度目をつぶってみた。ほんとうにただの夢であつてくれるように。しかし目に浮かぶのは、お金、ピカピカ光るあのまっさらなお金だった。

キドンイのおじさんは村で一番背が高い人。丘の上の草ボウボウの荒地にノマの父さんといっしょにトタン屋根の学校を建てた。そしてその学校からノマの父さんといっしょに、外出するときの上衣もひっかけず、帽子もかぶらないままで、大きな背を

かがめてソウルへとしよつ引かれて行った。きのう、そのおじさんが一年ぶりに坊主刈りになった頭で、顔はふくれて別人のようが目が小さくなって、村へもどってきた。そしておじさんは、ノマの父さんを置いて自分一人だけ出てきたことをノマと同じくらい残念に思つてか、大きな手で(注2)ごしごしと頭を掻きながらノマの家に来てきた。前とは違つて思はず顔をゆがめたノマの母さんは、何もいわずにしきりにチマの裾で鼻をかみながら目を真つ赤にした。

ノマは塀の角に隠れた。父さんに会つたみたいなのに、とても嬉しかったのに、おじさんに顔を見せるのが恥ずかしいのだ。そこにしゃがんでノマは動きまわっているアリの数を数えた。ノマは十より先は数えられないので、何度も十を繰り返した。十四、また十四、十四。とうとうキドソイのおじさんがノマのほうへやつてきた。そして、

「どれ、立つていさん」

あれからどれくらい背が伸びたか、それを確かめようというのだ。これも父さんが聞きそうなこと。ノマは黙つて立ちあがつてたくさんのことを聞きたいと思ひながら胸がいつぱいで、ただ見上げるばかり。立ち上がったかと思うと、突然、

①「かかつてこい、かかつてこい」

といつてキドソイのおじさんの股またぐらに頭を突つ込んでぐいぐい押しした。

「おいおい、こいつ、おい、こいつつたら」

おじさんはそういいながらたじたじとなつて後ずさりし、どしんと尻を塀にぶつけ、

「ああ、参つた、参つた」

始めつから勝負を挑いどんだわけではなかったけれど、ノマは口から出まかせで、

「負けたんだから、お駄賃ちょうだい、負けたお駄賃」

すると、ワツハツハと大きな笑い声とともに、ノマの小さな手のひらに置かれたお金、それがあのピカピカ光つたまつさらなお金だった。

そうでなくともお金というものは、持つて遊ぶのもよし、飽きたら朝鮮飴やら飴玉なんかに替えてもいいし、それになにより

穴あきの銀いろのお金なんて手にしたのは初めてなのだ。穴に糸を通してぶら下げたていいし。ああ、でもそのお金は、ノマがちよつとのあいだ腰紐の端にぶら下げたとしても、明日、母さんがソウルへ父さんに会いに行くときに使う大事なお金じゃないか。

ノマはこんなときには大声を上げるか、泣き出すよりほかに手が無い。たいがいのことはそうやって収めることができるとうわけだ。ノマはほかのときだったらとつくにそうしていただろう。だけど今度ばかりはそうはできない。そんなことをしたら、ノマがお金を失くしたことを家じゅうのみんなが知ることになるじゃないか。第一、母さんが知ったら顔色を変えるだろうし、じいやが聞いたらしょうもない奴だと舌打ちするだろう。トルトリまで知ったなら、いい気味だからかうだろうから、どうしたってそんな目に会うわけにはいかない。

ノマは黙って知らんぷりして様子をうかがった。

今日もいつもと変わりなく、窓の障子に陽が射しこみ、台所ではカタコトと母さんの後片付けの音、そしてじいやは裏の畑へ肥やしをやりに行った様子で姿が見えない。トルトリは縁側で足をトントン踏み鳴らして、屋根の上のカササギを追いはらっている。みんなノマがお金を失くしたとは夢にも思っていないみたいだ。^(A)自分一人だけがそのことを知っていると、ノマにはすぐくふしぎなこと。だからといってほかの人に自慢できないのはちよつとつまんない。

ノマはさりげなく、お金を探し始めた。いつになく布団をはたいて畳み、上にあげる。部屋の隅々を箒で掃き、床にうつぶせになって物指しの棒で筆筒の下の埃も掻き出す。ノマとしては働かふりをしてお金を探すつもりだけど、人から見ればノマはよい行いをしていると見えるだろう。そしてノマはお金を失くした罪ほろぼしにさらによい行いをたくさんしてはならない。

① ^(注3)ハき古した足袋の片方や、^(注4)脱ぎっぱなしのチヨゴリもみんな埃を払った。しかし探しているものは影も形もありはしない。

ノマは板の間に出てきた。そこでもひとしきり繰り戸の裏、米櫃の下、小豆の入った藁の籠までよいしょと持ち上げてはきれいに箒で掃いた。しかしやつぱり無駄骨折り。

ひよつとすると向かい部屋で失くしたのかもしれないぞ、とノマはそつちのほうに目を向けた。けれども父さんがいなくなつて空き部屋になつてからは入らなかつたあの部屋に、それもきのう入つたなどとは、お金をどこで落としか思い出せない以上に考えられないこと。でもだからこそなおさら、お金というはしっこい奴は、ノマがまだ行つてないそんな場所に姿を隠したのかもしれない。ノマはこぶしを握ると、べろんと一度舌でなめてみて、

「二本なら、あり。三本なら、なし」

そして二本の指に唾がついたのを見ると、その部屋の中にきつと探すものがあるはずと決めつけた。

(2) 前に父さんが使つていた部屋。戸を開けて一步踏み込んだとたん、ノマはハツと立ちすくんだ。壁にかけてある黒い帽子は前のまんま。ちよつと外へ出かけてじき戻つてくるようで父さんの姿を思いださせるが、机の上には埃がかび臭く積もり、向かい側の壁に貼つた地図は片方の端が垂れてゆがんでいる。そしてかすかに鼻につく父さんの匂い。いま、父さんはどこにおいでなのか、きつとすつかり変わつちやつたんだ。だからときどき母さんが新しく縫つた服を届けに行くし、代わりに持ち帰る古い服からは、けむつたい硫黄いおうの臭いがするし、裏の煙突の後ろから出る煤すすの臭いがして、そこからもぞもぞネズミが這はい出してきそうなんだ。

風の吹く日、キム伍長(注5)は酒に酔よつてふらふらと丘の上の学校にやつて来て、ひともんちやく起こした。石垣の上に登つて、入り口の戸に立ちほだかり、驚いて見上げる室内のたくさんオヤギンの目を一身に集めてこういつたのだ。

「お前らー、出て行け、出てけー」

そのキム伍長をノマの父さんは無言で胸ぐらをつかんで押し出し、そのまま下りて行つた。運動場の外の麦畑にのけぞつて倒れ、わざとらしく、しばらく起き上がらずにうつ伏せになつていたキム伍長オヤギンつたら、まるでブタみたい、それも欲張りののでぶつちよブタだ。

「どれ、お手並み拝見だ。ぞんぶんにやつてみる。やつたところでもろくなことはあるまいが。ろくなことないぞ」

そしてこつちへよろよろ、いまに見てる、あつちへよろよろ、見てろよ、といつて斜面を下りて行つたキム伍長。その後、キ

ム伍長のいうとおりになって行くのか、父さんは顔つきがだんだん暗く沈んでいった。夕方、チヨルコル峠の上にノマといっしよに登ったとき、父さんはぐるりを青い桑の木に囲まれてトタン屋根の光る学校をじっと見下ろして立っていたが、ノマを振り返って、

「おまえ、あーと声を張り上げてごらん」

ノマはいわれたとおり、両手をすぼめて口に当て、

「あー」

父さんは、また、

「もっと大きい声で」

ノマはもうちよつと声を張り上げて、

「あー」

「もっと大きな声で」

ノマは首を伸ばしてありつたけの声で、

「あー」

そしてトルトリが泣くときのようになり、顔をしかめて泣き笑いするみたいにノマを見下ろしていた父さんのあの顔。明日、その父さんに会いに行くのに使うお金、ピカピカ光ったまっさらなお金。父さんのあの部屋にもないなんて、あーあ。

ノマは向かい部屋からまたもとの板の間に出てきた。ノマはすっかりいつものクセ^②が出た。板の間の床のすきま、戸のすきまを隅々まで調べて、その後は縁側の端に立っているトルトリを上から下までじろじろ見た。腰紐の端にはなにもない。でも後ろ手に組んだ右手になにかをぎゅつと握っている。ほかのときでも、お餅なんかをとっておいて、後で食べるつもりで納戸の戸棚などに入れて置くと、ノマの知らないうちにこっそりって食べてしまうトルトリだ。ノマはどうしてもその握った手のひらの中が怪しいとにらんだ。

「おまえ、手に握ってるの、なんだ」

「知ってるの」

トルトリはいっそうしっかりとこぶしを握りしめる。ノマはとたんに怪しいと思った。どうやっても手のひらを開いて見るほかない。ノマは知恵をしぼった。

ビー玉を一個かざして、

「これ、誰のだ」

「ほくのだい」

「じゃあ、一度おじぎして両手で受け取らなくちゃね」

トルトリはいわれたとおり、鼻が膝にくっつくほどおじぎをして、手にもっていたものをポケットに入れてから両手を広げた。見たってなんにもない空っぽの手。ノマはもうがっかりしてしよげかえった。でもノマの目はふくれあがったポケットのほうばかりずっと追いかけて、どうしてもその中に探しているものが入っているように思えた。ノマはまた知恵をしぼった。

「おまえのポケットとほくのポケット、どっちがいっぱい入ってるか、あてっこするか？」

「勝ったら、なにくれる？」

「ビー玉、やるよ」

ノマよりポケットがふくらんでいるトルトリは、もう勝ったつもりで、にこにこ笑顔になった。

「ほくはこれだ」

ノマはドングリを一つさっと取り出して置く。

「ほくはこれ」

トルトリは瓶の栓を一つ、取り出す。それから続けて先のちびた鉛筆、丸くてすべすべした石、釘、ガラスのかけら、ゴム紐、カタツムリの殻、コガネムシの抜け殻……

「ほくは、これだ」

といて最後にノマはキセルの吸い口を取り出して、トルトリをにらみつけた。

「ほくはこれだ」

トルトリも負けずに握りこぶしを突き出した。

「なんだ、開けてみる」

「やだ」

「なんだと」

ノマはすばやく片手でトルトリの手首をつかみ、もう一方の手でしゃにむに握りこぶしをこじ開けてみた。しかし手の中は空っぽ、ポケットの中も空っぽ、ノマはまたしてもがっかりしたあげく腹が立った。

「なんとけちんぼめ」

しかしもつと腹の立つのはお金、こいつがどこへ隠れたのかわからないことだ。まるでノマを怒らせようとして見えないところへ隠れてあざ笑っているのしか思えないお金、ピカピカ光ったあのまっさらなお金だった。

ついにノマは板の間では見つけられないと、庭へ下りていった。

ノマはそこもすつかり、庭じゅうを箒で掃くつもりで、石垣の下を回って便所へ行く道へ。また離れの軒下を通って牛小屋の前まで行こうとすると、中庭はただっ広くて木の葉や藁くずに覆われていることが多い。どうしても隅々まで詳しく探してみようとするれば、また箒で掃いてみるしかない。ノマは長い草箒を抱えて手こずった。庭の離れ部屋のじいやは、こんな箒でよく掃いていたから、年寄りだからといって見くびってはいけない。そのじいやのように箒を逆さに立てて持とうとしてもうまくいかなかった。ノマはやり方を変えた。箒を横に寝かして、そいつを馬に見立てて中ほどにまたがった。そして真ん中を抱えてそろそろと後ずさりすると、なかなかうまく行った。誰がみても不自然でないように、ノマはことさらうんうんと力んでみせた。

台所で火をくべていた母さんの白い顔が二、三度ちらちらと敷居越しに現れたと思ったら、小さいキビの箒が一本飛んできて

ノマの前に落ちてきた。

「今日のノマはいつたいたいどうしたの?」

そしてさも珍しそうな顔で、母さんは火掻き棒をつかんで立ち上がり、こっちをのぞいた。ノマが本気でやっているのか、いないのか、それを見定めようとしているのだ。ノマはほんとうに見えるように、ひっきりなしに額の汗を拭ったり、ずり落ちるパジの腹のあたりをたくしあげたり、まめまめしくうんうんいいながら箒を動かした。母さんもとうとう本気だとわかったように、喜んでにっこり笑った。

そして母さんは縁側で見物だけしているトルトリに聞こえるような大きな声で、

「ノマはいい子だね、おこげのご飯、たくさんあげようね」

ところがノマは、

「ほく、いらない」

「おや、お腹でも痛いのか?」

「そうじゃないよ。トルトリにたくさんあげて、ぼくにはちよこつとだけちようだい」

母さんはまたまたびっくり。これまでなら、トルトリにはちよこつとだけあげて、自分にはたくさんちようだいとねだるはずのノマではなかったか。母さんはいつそう奇特なことと思つて、台所から出てきてチマの前にノマを抱き寄せ、両耳をつまんでよしよしとあやしてくれた。のらくらしてヤツカイばかり引き起こすトルトリに見せつけるためばかりではないはず。近頃はとても心細くなつて、夜便所へ行くときなど灯油の火皿を手で囲いながら持つて行く母さん。その母さんの前で、すっかり大人になったように、部屋を掃き、中庭を掃き、家事を手伝うノマなので、とてもいとしく思えるのはもちろんで、母さんは目を細めてノマの顔を引き寄せ、なでてくれた。³ノマはその母さんの目をまっすぐに見られなかった。とても気まり悪くて顔をそむけた。でもノマはふと嬉しくなつた。ほんとにいいことをしようとして、朝、部屋を掃き、中庭を掃いたのだから、それで母さんにかわいがられたんだもの。ほんとにそんなふうと思つて、ノマは母さんから離れてまた箒を持った。けれども箒の先で紙切れ

や木の葉が掻き出されるたび、その下にお金が隠れているんじゃないか、ぴかっと光って顔をのぞかせるんじゃないかと、いちいちハツとするノマ。そうやって便所への道まできれいに掃いたのに、お金はちつとも出てこないで腕が痛くなっただけ。あーあ！

(中略)

さきほどからユスラ梅の木陰に隠れて④ニクい面したヒキガエルが一匹、座り込んでノマの一举一動をうかがっている。ノマをひどく怖がっているような様子であるようにも見えて、身じろぎもせずじっとしている。なにやら罪を犯したらしいぞ。でなけりゃわけもなくノマを怖がるだろうか。ノマはそっちを見ないふりして顔をそむけてしやがみ、ずっと横目で動きをうかがってみた。そして突然、ふり向きざまに目をむいてにらみつけ、

「おまえが隠したんだな」

きっぱりと威してやった。ヒキガエルはびくつとからだをすくめてちよつと後ずさりして座り、目を一度パチクリしては、また動きがない。これはノマ自身の気持ちをおしはかり、こちらではないよと白を切る真似だと見るよりほかはない。

「この嘘つきめが、誰が知らないと思っっているのか」

ノマは鎌を掛けてみた。ヒキガエルはしかし、まばたき一つしない。こんな奴はじゅんじゅんといひ聞かせてやるしかない。「教えてくれたら、飴をちよびつとやるから、な」といっても効き目がないので、

「それじゃ、半分やるから」

ノマは嘘じゃないという証拠に、地面を三度踏んでみせた。そうやってもヒキガエルは目だけばちくりさせるばかりで、いっこうに答える気配がない。あんなに腹がふくらんでいるんだから、欲の皮がつっぱっているのもちよつとやそつとではないだろ

う。ノマは仕方なく、考えたすえ、

「じゃ、全部やるよ」

大声で気前よくいってやる。けれどやはりヒキガエルはからだをすくめて向きを変え、こっちへ尻を向けたなりで、ふん、とあざける様子。

「おまえがとって食べたんだろ、そうだから」

もう一度いって見ても、いかにも気味の悪い面がまえで、そんなもの一つくらいとって呑みこんだって、と知らんぷり。余裕たっぷりな顔太さだ。

「吐き出せ、吐き出せ」

機嫌をとつても聞かない奴は痛い目にあわせてこらしめるしかない。ノマは粗い砂を一つかみ握りしめて威してやった。そうしてヒキガエルは強情張って座ったままびくともしない。ぱつと砂を浴びせてやつと、どたつ、どたつ、二、三步跳ねてトウガラシの茎に頭をぶつけ、のけぞって息を切らせて手足をばたつかせる。白銅貨みたいに重いものを呑みこんでいなかったら、あんなふうにはからだのろくなるはずはない。

「それでも吐き出さんか」

「それでも吐き出さんか」

ノマは木の枝をムチにして振りまわし、通せんぼしながら自分もヒキガエルのように手足をばたつかせて大げさにしてやろうと、わざとばったりひっくり返った。

そのとき、母屋の板の間でなにか分けてもらっているのか、トルトリと母さんのやりとりが騒がしく聞こえてきた。

「ノマにはうんといっぱいあげるのに、ぼく、やだ」

「兄ちゃんね、たくさんお仕事したからたくさんあげるの。おまえはごたごたばかり起こしてるからちよつとだけよ」

そうしてまた静かになった。ひよつとするとノマの分まで取られたかもしれない。トルトリが両手に一つずつ食べ物を持っ

て、ノマの来る前に急いで食べてしまおうと、もぐもぐしている頬つべたが目の前に浮かんだ。ノマは一刻もためらっている場合ではない。ひとつ走り駆けつけければ、一つも取られずにすむはずなのに、あーあ、お金をみつけれられないのでは……。だけどヒキガエルのやつが呑みこんでしまつて返してくれないものを、ノマの力ではどうにもならない。

「ヒキガエルが呑みこんじゃつて返してくれないんだから、どうしようもないよ。母さんに取り返してもらわなくちゃ……」
こういえば、ノマの責任は十分逃れられる。何もなかったこととして、ピョンピョンとカササギの跳ねるみたいに嬉しそうに家の中へ入ることはできないだろうか。

思ったとおり、母さんはノマがたくさん働いたごほうびに栗を茹でてあり、ポケットがふくらむほど入れてくれた。ノマはとても嬉しくなった。お金はヒキガエルが呑みこんだのでノマの過ちではないこと、そして何も持っていない空っぽの手ではあるけれど、キドニーのおじさんにあのお金をもらう前の空っぽの手と何の違いがあるだろう。だからノマは朝からいい行いだけをしたわけで、堂々とごほうびをもらえないはずはないのだ。ノマはますます嬉しくなった。

ノマはじいやに自慢しようと離れ部屋まで行った。まずふくらんだポケットを叩いて見せた。十を何回数えたかわからないほどたくさん数の数なので、じいやがおやまあ、と声をあげたくらいだった。次に、どれほどおいしい栗か見せようとノマは一つ取り出してじいやの目の前でおいしそうに食べて見せた。じいやはしばらく眺めていたが、縄をなっていたかさかさした手を突き出して、一度大きく唾を飲み込んだ。一つだけおくれ、というさいそく。

「ぼくを捕まえたら一つあげるよ」

あげることはあげても、たっぷりからかってからあげるのでは面白くはない。

「くら、こいつめ」

「それじゃ、あげないよーだ」

「わしが、いいものやるから」

「ふん、キビの茎のメガネくらいなんだ」

「それよりうんといいいもんだぞ」

じいやはにやにや笑いながら近づいてきた。そのうちパツと飛びかかってくるようだった。ノマはそろそろと後ずさりして身をかわしながら、栗の皮をむいた。でもじいやにつかまる心配はない。じいやの歩き方といたら、よたよたして、ノマが後ずさりするのにさえ及ばないからだ。

「実はぼくが食べる。皮はじいやにあげる」

歌うようにいって怒らせると、

「こいつめ、お金、失くしちゃったろ？」

いきなりこんな言葉が、髭ひげの生えたじいやの口から不意に飛びだした。

「ふん、失くさないよ」

一言いい残して、ノマはすぐ逃げて出した。じいやは後を追いつつ、しまいまで聞くんだと、聞くんだと何度も大声でいった。ノマは納屋の後ろに隠れた。じいやのその声はなおも背中について回り、ノマはまた、裏庭のほうへと追われた。ところが不意に煙突の後ろから「こいつめ」という声とともにじいやの禿げ頭がにゅつと現れた。ノマはウサギのようにビクツと驚いて、逆戻りして台所へ駆け込んだ。そこでノマは母さんにはったり鉢合わせしてしまった。

「おまえ、お金どうしたの？」

ノマはにゅと笑って返事をせず、縁側に駆け上がった。母さんは濡れた手を前掛けて拭ふきながらついて上がってきて、

「お金、どうしたの、えっ？」

もう逃げようもない板の間の隅で、ノマはすぐに泣き笑いの顔になった。母さんに面と向かってはたちまち自信がなくなり、いべき言葉も出て来ないノマだけど、母さんはおかまいなしに急せぎ立てた。ほかのことはみんなわかってるのに、どうしてノマの気持ちはわかってくれないのだろうか。鏡をのぞくように、口には出さなくてもノマの気持ちは見抜いてうんうんと頷うなずいてくれたらどんなにかいいか。母さんはいかにわけて知ってしまうはず。ノマは顔が真っ青になった。ようやく口を開いて、

「裏庭でヒキガエルが呑みこんじゃって、返してくれないだもん」

「なんだって？」

「ヒキガエルが呑みこんで、返さないの」

石垣の上に登っていたじいやがそれを聞いて、腰を折って大笑い。母さんもつられてちよつと笑い、トルトリも真似してへッ、へッ、へと笑う。でも母さんはすぐに笑うのをやめて厳まじしい顔つきになり、ノマを見下ろした。それはわざと作った怖い顔。ノマはますます小さくなって、身も心もとても小さくなって、恐ろしい罰が下るのをはらはらして待つあいだ、一秒が一時間にも思えて気をもんでいたのに、意外にも母さんは表情をやわらげて、やさしく、

「さあ、いってごらん。ほんとは失くしたんでしょ。それでヒキガエルが呑んだなんて、いったんでしょ」

「うん、いくら探してもないんだもん。それでたぶんヒキガエルがどうかしたんだろうって……」

ヒキガエルが、という声はとても元氣のない声だった。じいやはまたもや嘔うき出した。ところが誰も笑わないので、すました顔をして刻みタバコ入れの袋をほどき、何やら人差し指でつまみあげると目の前にかざしてみせた。それはまさに穴のあいたまっさらなお金、あのピカピカ光った銀いろのお金ではないか。

「ヒキガエルが呑みこんだお金の奴、わしを取り返してやったぞ」

じいやはずつとにこにこ笑いながら、髭をしごくばかり。けれどもノマは、じいやが朝、中庭でお金を拾い、敷石の上に落としてみて、使えるお金なのかどうか試してみたらタバコ入れに入れてしつかり紐をしばったことなんか、夢にも知らないのだ。ただ、母さんもじいやも、二人ともににこにこしてくれるし、トルトリまでそうとなると、ノマだって一緒ににこにこできないはずはないのに、なぜかひくひくと泣きだして、戸の後ろへとノマは隠れるのだった。⁽⁴⁾

出典…玄徳「ヒキガエルが呑んだお金」作品社 一部変更を加えた。

発行日…二〇二二年四月三〇日

注1 パジ——ズボンのこと。

注2 チマ——現代ではスカートに当たるもの。

注3 足袋^{ボン}——靴下に当たるもの。

注4 チョゴリ——現代では上衣に当たるもの。

注5 伍長^{オシヤン}——伍長は、軍隊での階級を表すものではなく、村落における村長や区長のような役職を表している。

問一 傍線①～⑤のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部(1)「かかってこい、かかってこい」といってキドシイのおじさんの股ぐらに頭を突っ込んでぐいぐい押しした」とあるが、この時のノマの心情について説明せよ。

問三 傍線部(2)「前に父さんが使っていた部屋。戸を開けて一歩踏み込んだとたん、ノマはハッと立ちすくんだ」とあるが、それはなぜか。七〇字以内で説明せよ。

問四 傍線部(3)「ノマはその母さんの目をまっすぐに見られなかった。とても気まり悪くて顔をそむけた」とあるが、それはなぜか説明せよ。

問五 傍線部(4)「なぜかひくひくと泣きだして」とあるが、なぜノマは泣きだしたのか。その理由として適当ではないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア お金が見つかり、ノマはとても安心した。それまでノマは、不安でいっぱいだったのだが、緊張感が一気に緩み涙が出てきた。

イ 母親に厳しく叱責されると思っていたので、ノマはとても心配していた。しかしお金が見つかり、母親に叱られることはないと思いきや涙が出てきた。

ウ ヒキガエルが飲んだことに確信が持たず、母親には嘘だと思われ、不安な気持ちを抱いていた。しかし、じいやにヒキガエルから取り戻したと言われ、安心して涙が出てきた。

エ じいやはヒキガエルから取り戻したと言ったが、ノマは皮肉を言っていると思った。じいやに反論できない自分が情けなくて、ノマの目から悔し涙が流れ出てきた。

問六 傍線部(A)「自分一人だけがそのことを知っているというのは、ノマにはすごくふしぎなこと」とあるが、この小説の中には、ノマ以外の人物の「自分一人だけがそのことを知っている」ことも記されている。そのことが含まれる一文の最初と最後の五文字(句読点を含む)を抜き出せ。

三、次の文章は、ものごとの長短を分析した横井也有の俳文「長短解」に基づく。これを読んで、後の問いに答えよ。

大はよく小を兼ね、短きは長きに卷かるるためし、世にその類多かり。君を賀し人を寿ぐにぞ、^(注1) 齡を長浜の鶴に比へ、あるは龜の尾山の尾を引きて、^(注2) 五百八十七曲りと祝ひものするには、飽くかたあらじかし。

その余は、ひたぶるに十八ささげのゆたけきにならへば、^(注3) 独活の大木の誇りを逃れず。矮鶏の足は短きを愛し、^(注4) 禿が返辞は長きにのどけし。出る杭かしら打たれてつひの益なく、^(注5) 下手の談義の止まり兼ねては、軒の柳も眠り貌なり。ただ、女の髪こそめでたくてあらましを、^(注6) 手長き人は一門にも遠ざけられ、鼻の下の伸び過ぎたるは、大事の相談に漏らされて、その夜のうごんどの長きを知らず。されば、必ず 1 は 2 が上にも立ち難し。ものはただ秋の夜の長くてよからむは長く、^(注7) 難波潟短き葦の 3 ずしてよきは 4 てあらなむ。^(注8)

ざるを、^(注9) 聖人も右の袂の自由をものずけり。世に式法を細かに定めて、^(注10) 兼ね合ひ極まるものもあり。天地もと窮屈ならず、^(注11) 短は自然に備へて寸分の詮議はなし。摺粉木は両手に握るを程とし、^(注12) 杓子・さい槌は片手に足れり。下さまのものながら、^(注13) 天理のままなるぞ尊けれ。

我が友田氏、^(注14) 過ぎし頃かりそめの旅のつとに煙管を贈れり。その 5 こと掌に隠すべし。我、この秋、西郊に遊ぶことありて、^(注15) 重宝甚だ長きにまされり。これをくはへて手を借らず、^(注16) 久しくして歯を勞せず。行く行く野山に雲を吹き、^(注17) 飽く時は袖に収む。ここにおいて感あり。つひに長短の解を作りて、これを報ふの言葉に代ふ。その辞の長過ぎたるは、^(注18) また、才の短きゆゑならし。

(本文は『新編日本古典文学全集』〈小学館〉により、一部改変を加えた。『鶉衣』所収)

注1 齡よほひを長浜の鶴たづに比へ、あるは亀の尾山の尾を引きて——ここでは「年齢を鶴の千年になぞらえ、あるいは亀の万年に引き比べて」の意。

注2 五百八十七曲り——「五百八十年の七回り」の意で、長寿を祝う言葉。

注3 十八ささげ——豆の一種で、さやが非常に長いもの。

注4 禿かむろ——遊女に仕える童女。

注5 手長き人——盗みぐせのある人。

注6 鼻の下の伸び過ぎたる——愚かで鈍い人。

注7 夜のうどん——夜食のごちそうのうどん。

注8 難波瀉短き葦——『新古今和歌集』所収の「難波瀉短き葦の節の間も逢はでこのよを過ぐしてよとや」による。

注9 聖人も右の袂の自由をものずけり——ここでは「孔子も右手の自由のため、わざわざ右の袂を短くされた」の意。

注10 式法——規則。

注11 兼ね合ひ極まるもの——きっちり釣り合いのとれたもの。

注12 下しもさまのもの——下民の用いるもの。

注13 田氏——津田氏の略。

注14 つと——みやげ。

問一 傍線部①「飽くかたあらじ」、③「髪こそめでたくてあらましを」、⑥「天理のままなるぞ尊けれ」、⑦「重宝甚だ長きにまさり」、⑧「久しくして齒を勞せず」を、わかりやすく訳せ。なお、①「飽く」、⑥「天理」、⑦「重宝」は他の語に変えて訳すと「天の理」も不可。

問二 傍線部②「ゆたけきにならへば」、④「遠ざけられ」、⑤「あらなむ」を、例にならって、文法的に説明せよ。例は一行だが、二行で書いてもよい。

例 長き(形容詞・連体形) を(助詞・格助詞) 知ら(動詞・未然形) ず(助動詞・打消・終止形)

問三 空欄1～5について、「長し」または「短し」のうちから一方を選び、適当な活用形で入れよ。

問四 傍線部⑨「雲」は、何をたとえているか。簡潔に答えよ。

問五 傍線部⑩「報ふ」は、誰のどのような行為に対し、誰がどう感じて「報」いるというのか。具体的に説明せよ。

問六 傍線部⑪「辞の長過ぎたるは、また、才の短きゆるゑならし」について、次のⅠ・Ⅱを答えよ。

Ⅰ 文章に即してわかりやすく訳せ。

Ⅱ 筆者のどのような姿勢を示したものか。次のア～オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 忠告 イ 謙遜 ウ 感謝 エ 教訓 オ 自慢

四、次の文章は、春秋時代に他国から攻撃を受けて滅ぶこととなった虢国かの君主（虢君）に関する説話である。これを読んで、後の問いに答えよ。解答は現代かなづかいでもよい。なお設問の都合で訓点を省略した箇所がある。

虢君出走、至^リ於^ニ沢中、曰、^{ハク}「吾渴^カ而欲^ス飲^ム」。其御乃^チ進^ニ清酒^ヲ。曰、^{ハク}

「吾飢^エ而欲^ス食^ム」。御進^ニ腍脯^ヲ。梁糗^ヲ。虢君喜^ビ曰、^{ハク}「何^ソ給^ス也」。御曰、^{ハク}

「儲^{フルコト}之久矣」。曰、^{ハク}「何^ニ故^ニ儲^{フルヤト}之」。対曰、^{ハク}「為^ニ君^ガ出亡^{シテ}而道^ニ飢渴^{スルガ}也」。^ト

君曰、^{ハク}「知^ル寡人亡^ル邪」。対曰、^{ハク}「知^レ之」。曰、^{ハク}「知^レ之何以不^レ諫^ム」。対曰、^{ハク}

「君好^{ミテ}諂^テ諛^フ而惡^シ至^ル言^ヲ。臣願^フ諫^ム、恐^ニ先^ニ亡^ル」。虢君作^シ色^ヲ而怒^ル。御

謝^リ曰、^{ハク}「臣之言過^リ也」。為^{シテ}問^フ、君曰、^{ハク}「吾之亡^ル者、誠^ニ何^ゾ也」。其御曰、^{ハク}

「君弗^レ知^ラ耶。君之所以^ノ亡^ル者、以^テ大^{ナル}也」。虢君曰、^{ハク}「賢^ハ人之所以^ノ

存^ス也。乃^チ亡^ル何^ゾ也」。対曰、^{ハク}「天下之君皆不^{ナリ}肖^カ、夫疾^ニ吾君之独^リ賢^{ナル}也、

故^ニ亡^ル」。虢君喜^ビ、抛^{リテ}式^ニ而笑^フ曰、^{ハク}「嗟^ア、賢^{ナル}固^ク若^ク是^ノ苦^{シキ}耶」。遂^ニ徒行^{シテ}而於^ニ

山中^ニ居^ル。飢^エ倦^{ツカレテ}、枕^ニ御^ノ膝^ニ而^ス臥^ス。御^ヲ以^テ塊^ヲ自^ラ易^ハ、逃^レ行^{キテ}而^シ去^ル。君^ニ遂^ニ餓^シ死^ス。
為^ル禽^ノ獸^ト食^ト。

(賈誼『新書』による)

注 ○御——御者。 ○殿脯梁糗——香料を加えた干し肉と干し飯。携帯用の食事。

○寡人——號君が自身を指す呼称。 ○詔諛——こびへつらうこと。 ○為間——しばらくして。

○扱式——車の前の横木にもたれること。 ○塊——土のかたまり。

問一 傍線部①「進」、②「何故」、④「悪」、⑤「作色」、⑥「謝」、⑦「過」の文中における意味を記せ。

問二 傍線部③「知之何以不諫」を平易な現代語に訳せ。

問三 Aに入る最も適当な漢字一字を本文中より抜き出して答えよ。

問四 傍線部⑧「號君喜、抛式而笑曰、「嗟、賢固若是苦耶」といふ號君の言動について、筆者自身はどう考えているか。最も適

当なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 愚かな者は賢い者をねたみ攻撃する。

イ 愚かな者は自分の愚かさに気づかない。

ウ 賢い者には賢い者なりの苦しみがある。

エ 賢い者も周囲から理解されなければ活躍できない。

オ 賢い者もその賢さに溺れれば身を滅ぼす。

問五 傍線部⑨「以塊自易」は、何をどうすることを言うか。二五字以内で説明せよ。

問六 號君が国を失い、自らも命を落とすこととなった理由を、筆者はどう考えているか。全体の主旨を踏まえて、最も適当な

ものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 御に対して怒り、その恨みを買ってしまったため。

イ 御の言うことをそのまま信じてしまったため。

ウ へつらいの言葉を好み、批判をさせなかったため。

エ まわりの国々の君主からねたみ嫌われたため。

オ 自分に及ばない者の意見は聞き入れなかったため。